



TITLE:

倉敷天文臺通信

AUTHOR(S):

荒木, 健兒

CITATION:

荒木, 健兒. 倉敷天文臺通信. 天界 1931, 11(123): 355-356

ISSUE DATE:

1931-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161675>

RIGHT:

倉敷天文臺通信

倉 敷 荒 木 健 児

臺長が多いので世界に有名?な倉敷天文臺で私は「臨時臺長」の名稱を頂戴してゐます。

所謂「民衆天文臺」として多くの參觀者に接してゐますと、いろいろ世相がわかつて參ります、そして考へさせられます。

第一には、一般民衆に天文學的常識の殆んどないとてもいひたいことで、田舎の善男善女は「天文臺の拜觀をしたいから」と言つて來ます。彼等はまるで望遠鏡を「お寺の寶物」位に考へてゐるのでせう。これ等の人々を導くのも私の尊い一つの仕事です。

熱心な（悪くいへば私には非常に迷惑のこともあります）參觀者は月や星を見たいために夜にまでもおそつて來ます。「先生!! 木星が見えぬやうになりました!」のさげびに驚かされます。地球の自轉といふ事實をよく知つて居りながら、それが望遠鏡の視野のなかにあらはれてゐることに氣づかないのですね。

多くの星の友から天文に關する寫眞を送つて頂くことを感謝してゐます。これ等でアルバムをつくりたいと思ひますから、今後ドシンドシ御自慢の望遠鏡や御手すびの天體の寫眞、その他觀測者の面影などを頂きたいものです。

會員の來訪ほど嬉しいことはありません。倉敷の會員吉澤君とは度々會ひますが、その他これまでに長谷、東、稻葉、沖、宮本の諸君が訪ねて下さいました。今後は一層多くの會員諸君の度々の御來訪を歓迎します。私はいつも差支ないものと考へてゐて下さい。時には私の觀測をサボツテでも歡談痛論します。

臺長、助手、書記、小使を一手に引受けてゐます。そして天上の愛人としづかにささやき合つてゐる生活は面白いものです。

いらぬことばかり書きならべましたが、來月からは少し氣のきいた材料により改めて御目にかけませう。(1931年4月27日稿)

「天 界」前號の正誤

| 頁 | 行 | (誤) | (正) |
|-----|-----|------------|-----------|
| 287 | — | シールト | ショート |
| 289 | 9 | (第三回) | (第三圖) |
| 290 | 3 | L片が降りてゐた時。 | L片が降りた時。 |
| 291 | 1 | 力學上 | 機構上 |
| 297 | 4 | 引上げるやうにのY片 | 引上げるやうにY片 |
| 302 | 最下段 | シンクロノム會 | シンクロノム會社 |

編輯室より

かねての御約束の如く、今年の「夏のグラフィック」號としての天界をこゝに御眼にかける。編輯室には、いろいろの原稿が山積してゐて、此のグラフィックに、「あれを載せようか?」「これを出さうか?」と、苦心して見たが、とうとう今度は、夏の夜の読み物にふさはしいものとの目的で、「月」のために大部分を献けることにした。見給へ、巻頭の「月の寫眞のパレード」を!! 此の十七枚の「月の寫眞」は、中村要氏が花山の三十センチで、ちか寫しに撮つたもので、これほどの見事な一揃ひは、國內にも國外にも、例のない珍品である。

次ぎに、又、珍らしい天保時代の「太陰之圖」を御眼にかける。今から百年も以前の舊幕時代に、我が國で此ほどの精密な觀察が行はれ、しかも其れが此の如き完全な形に於いて保存されてゐるとは、驚くの外は無い。之れを本誌に發表し得たのは非常な光榮であると共に、此の原圖を御親切にも送つて頂いた熊本の池田氏に満腔の感謝をさへけたい。

本山翁が花山へ來られて、豪華な「お月見」をされたのは昨年の十月であつた。もはや其れから滿一ケ年に近い。こゝに其の時の記念寫眞を添へる。クツクの三十センチで。遠い々々月世界を探るべく、觀測用の階段へ高くよぢ登られて、吾れを忘れてゐられる有様である。傍に立つて、月世界の案内をしてゐられるのは、言ふまでもなく我が山本博士である。

次ぎの八月號からは又、普通の編輯で、興味と新鮮の記事を満載する。會員諸氏より、ひろく原稿を募る。但し毎月の〆切は月末である。

新會員を募る。

新會員の紹介を希望す。

會員の總數が二千名になるまで。前途は未だ遠い!!

天 文 同 好 會